

ドレミファ器楽

フル・スコア SK-101



バッハ 主よ、人の望みの喜びよ

小島里美編曲

J.S. バッハのカンタータ第147番「心と口と行いとなりわい」の最終楽章が、この曲の原曲で、さらにコラールの旋律は、ヨハン・ショップの「我が気分よ愉快になれ」がもとになっている。それをバッハが、 $\frac{3}{4}$ 拍子、4声部の合唱カンタータとし、トランペットの対旋律を伴う、弦および通奏低音などの装飾的な伴奏を加えた形に仕上げている。1920年のバッハフェスティバルで演奏された、このカンタータに魅せられたマイラ・ヘスが、その後ピアノ用に編曲し、ここでの器楽合奏用の編曲はそれに基いたものである。

今日ではあらゆる楽器編成で演奏され、数多いバッハの作品の中でも、特に親しまれている一曲となっている。

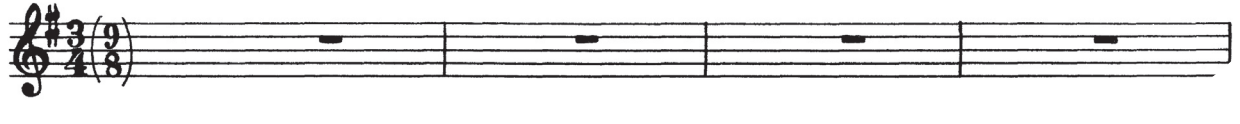
〔演奏上の注意〕

ゆったりと、しかも淡々とした $\frac{9}{8}$ 拍子の流れにのり、静かに始まって次第に盛り上げていき、また静まって終わる、という構造になっている。エンディングで rit. をするかしないかは、指揮者の音楽的趣向にまかせる。ここで最も注意したいのは、音量のバランスである。各団体毎に人数はまちまちであるから、ここでの強弱記号は一つの目安として、さらに自分の編成にあった音量を求めて、バランスのとれたサウンド作りをしなければならない。例えば冒頭の木琴であるが、マリimbaがあれば申し分ないが、木琴だけで、しかも台数が少ない場合は(ソフトマレット使用の為)大きめに叩かなければならない。ここでは音色も非常に大切であるから、音量だけを考えたハードマレット使用は、さげなくてはならない。全体的に低旋律は大きめ、打楽器群は小さめにするとよい。特に(H)のトライアングルのトレモロはppで軽やかに。それには細いスティック(トライアングル用か何かを代用する)で奏しないと難しい。どうしても大きくなってしまえば、休んでも構わない。①の1小節前、②の2小節目に  (鍵盤ハーモ等)と  (テナーアコ等)が同時に出てくるが、各々他のパートに左右されず、(特に後者はハッキリと)奏すること。以上である。


 ミュージックエイト

Adagio

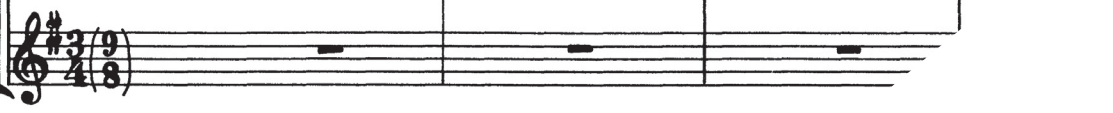
フルート
(無くても)
(演奏可能)



ソプラノ
リコーダー



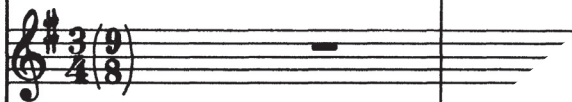
鍵盤
ハーモニカ



ソプラノ
アコーディオン



アルト
アコーディオン



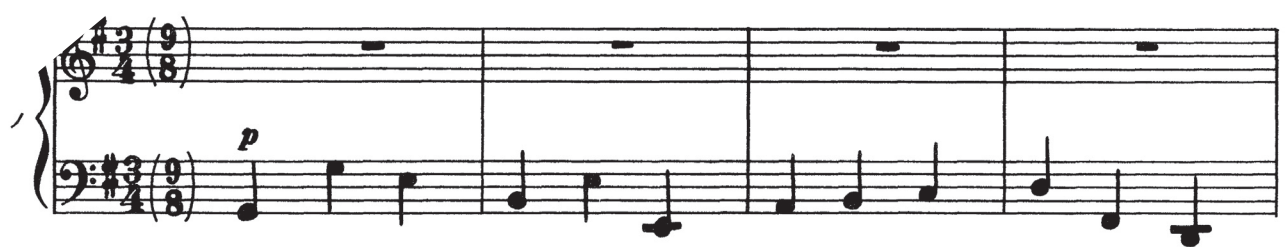
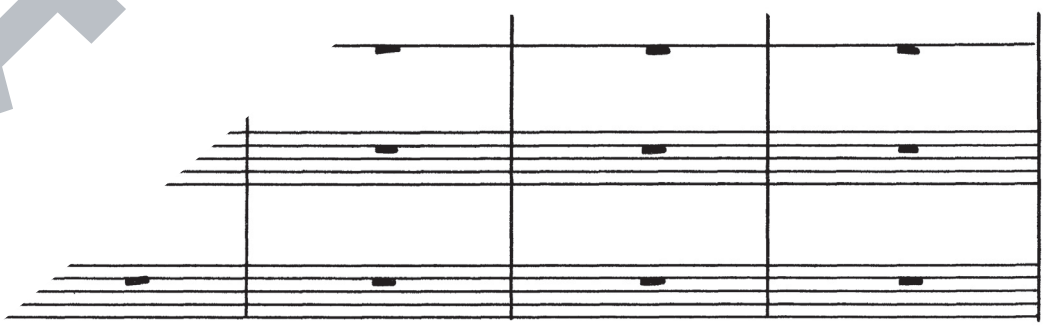
テナー
アコーディオン
(オクターブ
上に記譜)



バス
アコーディオン



木 琴



バッハ
主よ、人の望みの喜びよ

鍵盤ハーモニカ

小フ

Adagio

